

中学3年 英語科 ” Hot Sports Today”

柏市立柏第二中学校 相馬 匠

1. 自己調整を意識した授業づくり

本単元のねらい：自己調整力にさらに磨きをかける

- 本単元では、これまでの実践で培ってきた「自分で学び方を選び、計画し、改善できる力=自己調整力」をさらに磨きあげること目的に授業を設計した。
- これは3年間を通じて掲げてきた「学び方を学ぶ」というテーマに基づいており、学習を可能な限り苦痛に感じさせないために適切な励まし、つまりいた際のフォローを意識している。

生徒主体の授業とするための準備・環境設定

- To Do リストによって、生徒自身が内容・順序・学習手段を選択できるようにした。
- 単元テスト、ディスカッションという明確なゴールを示し、そこへ向けて、もしくは自分なりに決めた目標に向けて、自分で学習を組み立てられる環境を整備。
- ICT (Quizlet, World Classroom) や紙教材、会話練習など複数の学習スタイルに対応する手段を用意。

放任とならないための工夫・これまでの支援

- 自由=放任とならないよう、「今どこまで進んだ?」「次は何をする?」という進捗確認の声かけを常に行ってきた。
- 進みが遅い生徒には、スモールゴールを一緒に設定し、「できた」を積み重ねさせることを徹底。
- 「わからないときはどうするか?」を具体的に指導し、質問しやすい・助けを求められる関係性を築いてきた。

支援のポイント (意識した点)

- 「見取り」と「声かけ」の連動が支援の核。何ができていて、何につまずいているのかを見極め、個別に助言する。
- 「選べない」「続かない」生徒には、選択肢を絞る・作業を分割するなど、段階的な自立支援を行う。
- 成果を言語化・可視化すること (リフレクション・ルーブリック) で、自己評価→改善の流れを習慣化させる。

本時で設定した学習レベル

- 本単元の教科書内に読めない単語がないことを目指しつつ、生徒が自分に合った順序・方法で学習できる自由進捗型。
- ICT 活用やペア練習などで、「理解」「実践」までの段階を自分で選べるレベル設計をした。

子供へ委ねる段階	1	2	3	4
課題	教師が課題を決める	子供に選択肢から選ばせる	子供が選択肢をつくり、選ぶ	子供が自分で課題を決める
過程	教師が意識して過程を回す	過程の一部を子供が回す	ほぼ子供の意思決定で過程を回す	全て子供の意思決定で過程を回す
形態 (個別・協働)	教師が誰とどう学ぶかを定める	過程の一部で誰とどう学ぶかを子供が決める	過程のほぼ全てで誰とどう学ぶかを子供が決める	全ての過程で誰とどう学ぶかを子供が決める
ツール	教師が何をを使うか決める	子供に選択肢から選ばせる	ほぼ子供が自分で使うツールを決める	子供が自分でツールを決める
空間	教師が学びの空間を決める	子供に選択肢から選ばせる	ほぼ子供が自分で学ぶ空間を決める	子供が自分で学ぶ空間を決める
ペース	全員同じペースで学ぶ	一部学びたいペースで学ぶ	子供がほぼ学びたいペースで学ぶ	子供が学びたいペースで学ぶ

2 実践の流れ

◆ 授業準備の工夫と AI の活用

本実践では、「学習が苦痛に感じないこと」を前提に、生徒が主体的に選び進められる教材環境を徹底して整えた。具体的には以下の教材を用意した：

- Quizlet（単語のフラッシュカード練習）
- Kahoot・Gimkit（クイズ形式の単語練習：4択・記述対応）
- Wordwall（教科書本文や文法の並び替え問題）
- 受験風長文読解プリント／単語・対訳プリント
- WorldClassroom（AIによる音読評価アプリ）
- GPT活用会話練習プロンプト
- YouTube教材リンク（文法解説）・学習リンク集スプレッドシート
- 単元目標記入シート・会話例文プリント

これらの教材は、教科書のテキストデータを読み込ませてAIで一括生成。特に4択クイズや文法問題などは表に貼り付けるだけで完成し、生成AIの活用により教材準備の時間を大幅に短縮している。

◆ 授業の流れと自己調整支援

1. 導入：目標の共有と可視化

- ・最終課題と今回の学習目標を提示し、生徒自身に「今回の目標」と「自分がやること」を記入させた。

2. 単語学習 → 文法・教科書の理解

- ・まず単語を習得。続いて文法と教科書を扱った。ここでは「習熟」よりも「理解」を重視。
- ・授業中に「ほーん、なるほど」と思えるレベルを目指した。

3. 自学・習熟時間：選択と支援の時間

- ・To Doリストをもとに、各自が自分の進捗・目的に応じた活動を選択。
- ・英語が苦手な生徒や目標が定まっていない生徒には教員が責めずに寄り添う支援を行った。
- ・「やっていない理由」には背景があると捉え、動機づけや意味づけを対話を通して促した。

4. 評価とフィードバック

- ・テストは能力を正確に測るため厳密に実施し、立ち位置を明確に伝えた。
- ・余裕があれば、前回との比較や成長のポイントを言語化してフィードバック。
- ・単元末には振り返りを書かせ、内容に応じてコメント・口頭賞賛を加えた。

◆ 自由進度的な学習の効果について

1. はじめに

近年、子どもたちの「自分で考えて学ぶ力」を伸ばすため、本校では自由進度的な学習（一人ひとりが自分のペースや方法で学習内容・順番を決めて進める活動）に取り組んでいます。今年度は、生徒アンケートを通して、この学び方がどのような効果をもたらしているかを検証しました。

2. 調査概要

- 対象：本校1～3年生（計426名）
- 方法：英語の授業に関するアンケート
- 主な設問例：
 - 自分でやることや順番を決めて勉強する時間はあったか
 - できなかった問題をやり直したか
 - 難しい問題にもあきらめず取り組めたか
 - 勉強すれば自分の力がつくと感じたか など

3. 分析結果（t検定）

■ 「自分で学びを進める経験」が多い生徒は、以下の項目で有意に高い得点となりました（すべて5点満点）。

設問	高グループ (自分で進めた経験多い)	低グループ (少ない)	差
できなかった問題をやり直す	4.3	3.5	+0.8
難しい問題にもあきらめず取り組む	4.3	3.5	+0.7
勉強すれば力がつくと感じる	4.5	3.8	+0.7
友だちと教え合う	4.4	3.8	+0.6
やり方を工夫する	3.9	3.2	+0.7
「今日はこれをやろう」と決めて勉強	4.4	3.4	+1.0
間違いが続いても再挑戦しようと思う	4.2	3.6	+0.6

※すべての項目で統計的に有意な差（ $p<0.01$ ）が出ました。

具体例

- 「できなかった問題をやり直す」：高グループは4.3点、低グループは3.5点
- 「難しい問題にもあきらめずに取り組む」：高グループ4.3点、低グループ3.5点
- 「勉強すれば力がつくと感じる」：高グループ4.5点、低グループ3.8点

■ その他の分析（相関・回帰）

- 相関分析や回帰分析では、t検定ほど明確な違いは見られませんでした。
- 主な差異は「自由進度的な学習の経験」による行動・意欲面の項目で表れていました。

4. 生徒の声（学年別・代表的なコメント）

3年生

- 「英語が少しずつ話せるようになって良かった。」
- 「友だちと教え合うことで分かることが増えた。」
- 「自分で目標を立てて頑張ることは苦手だったけど、繰り返すうちにできるようになった。」

- 「間違えても、もう一度チャレンジしようと思えるようになった。」
- 「発表やスピーキングテストで英語で話す自信がついた。」

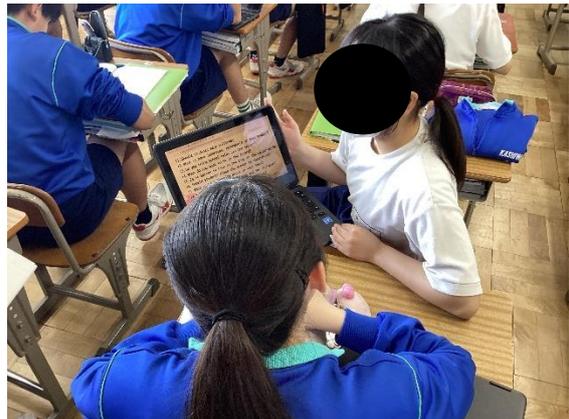
2年生

- 「できなかった単語が書けるようになってうれしい。」
- 「単語を覚えられたとき、文の意味がわかって嬉しかった。」
- 「自分から積極的に英語を使っていきたい。」

5. まとめ・今後の展望

- 自由進歩的な学習の授業では、「自分で考えて学ぶ力」「あきらめずに取り組む姿勢」など、子どもたちの「学びに向かう力」が確実に育っています。
- 生徒自身の声にも、「できるようになったこと」「自信がついた」といった前向きな変化が数多く見られました。
- 今後も、一人ひとりの主体性を大切にする学びをさらに充実させていきます。

◆ 授業の様子や成果物について



学力高位層生徒の振り返り（定期テスト80～90）

